

CASE

1

和光国際高校(埼玉・県立)  
新井晋太郎先生

CASE

2

出水商業高校(鹿児島・出水市立)  
山下優香先生

CASE

3

若狭高校(福井・県立)  
小坂康之先生

CASE

4

唐津西高校(佐賀・県立)  
中西美香先生

# 生徒の開かれた キャリアのために、 先生ができること

入学と卒業で常に生徒が入れ替わる学校で、思いもよらない出会いも経験し、  
どう受けとめるか思案もしているであろう先生方。その体験があるからこそ、  
生徒の機会と選択についてサポートできることがあるのかもしれない。

4人の先生方の取組をご紹介します。



CASE

1

# 挑戦して承認もされる機会をつくり 自ら道を拓こうとする姿勢を育む

和光国際高校(埼玉・県立) 新井晋太郎先生

取材・文／松井大助 撮影／澤崎信孝



## 挫折や回り道もある人生で やりたいことに向かうには

「チャレンジすること」と「自分を信じてがんばり抜くこと」。生徒たちがそんな経験をできる機会を増やしたい。和光国際高校の新井晋太郎先生はそう思っているという。

「チャレンジして、仮に失敗しても、そこから学ぶことができますし、失敗が悪いことだとは思っていません。また、人生には『どうがんばってもできないことがある』ものですが、それでも自分を信

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 生徒たち自身による 企画や運営の機会を

大小さまざまな教育活動のなかに、一部でもよいので、生徒たち自身で企画や運営にチャレンジする機会を設ける

#### 2 生徒の挑戦を発信し 本人や周囲を刺激

生徒の挑戦を記録し、ネットや校内で発信。がんばりが承認されるようにしつつ、その情報で他の生徒の挑戦も促す

#### 3 1対1の時こそ 生徒の変化に着目

距離があっても変化を察知しづらい生徒でも、その成長に気づき、承認していけるよう、1対1の時間を大切に

あらい・しんたろう●大学卒業後、食品メーカーに入社。3年目に退職し、塾講師、私立高校教員、東京都立中学校教員を経て、埼玉県公立高校教員に。高校1校目となる工業高校の定時制では、民間企業やNPOなどの外部と連携し、職業人との交流をはじめとするキャリア教育を推進した。2023年より現職。





じていろいろなことに挑み、がんばっていくと、道が拓けて、やりたいことにたどり着けるようにも思うのです。そう思うのは、僕自身が挫折や回り道をたくさんしてきたからかもしれません」

教員になりたいと思って大学に進学したが、当時は教員採用がほとんどない氷河期。途中で諦め、教職課程を取るのもやめた。卒業後、食品メーカーに就職。だがモチベーションが続かず「この世界では通用しない自分」を味わった。3年目で退職、塾の講師に。その時に「人に教えるのが好きだ」と確信し、大学に通い直して教員免許を取り、私立高校の非正規教員になった。ところが3年で契約を打ち切られる。それでもめげずに、東京都の教員採用選考を受け、合格して中学校に配属された。3年間働いたのち、心惹かれていた高校勤務をするために埼玉県の教員採用選考を受け、現在に至る。

「自分の経験を通して思ったんです。生徒が勉強して良い学歴や経歴を手にもすることに一定の意味はあるけれど、それ以上に大事なことは、学校生活全般で『挑戦することで自分や社会を知る』『粘り強くがんばる』といった姿勢を培うことなのでは、と。そうした姿勢は、どこの世界でも普遍的に通用するでしょうから」

だから新井先生は、生徒が自分たちで企画や運営にチャレンジするような場を生み出そうとしてきた。

前任校では、定時制の生徒たちに今まで参加していなかった文化祭への出店を呼びかけ、皆でやり抜くなかで自信をつけていく姿を見守った。

現任校では、国際教育部の担当として、留学生の受け入れや、生徒の海外研修の際に、相手

国との交流の一環となる「歓迎会」「お別れ会」の企画運営を生徒に委ねてきた。また、バレーボール部の顧問として、近隣の中学校のチームを招待する大会を開催。大会運営を生徒たちに任せ、生徒たちがフランス語、スペイン語、中国語で挨拶する場も設けた。

「進学校の生徒の日常は、教科学習が中心で、文化祭や体育祭など一部の行事をのぞけば、ほかの活動は『時間をかけられない』と教員のほうで企画や運営を進めがちです。ですが、生徒たちは中学校までにいろいろな出し物や式典をやっているから、できることは任せると、結構、生き生きと動いてくれるんです。そうして自分たちで何かを成した経験が、この先も自分で道を拓けるという自信に繋がるように思います」

## 変化に気づくことで 成長を後押ししたい

生徒たちのチャレンジやがんばりを発信することも力を入れている。

例えば、和光国際高校の海外研修では、希望した生徒がイギリスなどに2週間ホームステイする。新井先生は「普段とは異なる地でサバイバルする」またとない挑戦の機会と思っているので、事前の説明会から力を入れ、個別にも声をかけるそう。そのうえで、研修中は生徒の様子を写真や動画に撮り、学校のホームページやSNSにアップしている。

「自分の挑んだことが記録に残り、保護者やほかの人にも見てもらえると、喜んでやる気が増す生徒も多いんです。保護者の方も楽しみにしてくださっていて。そうした発信を通して、まだ踏み出せ



ないでいる生徒たちに、挑戦することの魅力をアピールすることもねらっています」

新井先生自身が、がんばっている生徒一人ひとりの「変化に気づく」ことができるようにも努めている。

「Acknowledgement (承認)に関する本を読んだのがきっかけでした。会社員時代にもがいていた自分を思い返しても、承認されることって大事だと思ったのです。定時制高校の生徒たちとの出会いも大きかったですね。自己肯定感が下がっていた子が多かったのですが、クサイ言い方かもしれませんが、愛情をもって個々の成長に目を向けていくと、生徒たちがどんどん変わっていったんです」

変化に気づくために重視しているのが、担任としての二者面談だ。新井先生は毎学期、面談を行っている。

「面談の機会がないと、『普段から寄ってきてくれる生徒』の変化にばかりよく気づくような偏重が生まれかねません。集団の中にいる時と、1対1の時では、教員に見せる顔が変わる生徒もいますよね。

本校には、勉強も部活動もがんばっている、いわば手のかからない生徒がかなりいます。ですが、高校生って、僕もそうでしたが、みんな不安を抱えていると思うんです。何のために勉強しているのか、何を目標せばいいのか、わからなくなったり。そうした悩みを聞き出し、いろいろなことに挑戦しようと背中も押しながら、個々の成長を見守りたいと思っています」

ちなみに、かくいう新井先生も、「教員の仕事に慣れてきた今、ここから自分が何を目標せばいいのか、実はすごく悩んでいる」のだそう。

「でも人生はそういうものかな、ずっと悩み続けるのかな、とも思います。だから今の目標は、自分にできることを日々一生懸命やることです」

## 新井先生の「現在地」

## 多様な出会いと別れのなかで生徒のチャレンジを促す

国

際高校ならではの校務分掌、国際教育部に所属する新井先生。イギリスやオーストラリアの海外研修や、シンガポールの修学旅行の内容を、海外派遣プログラム作成経験のある同僚と考え、現地の学習にも同行している。

それらの活動では各国の人との交流も重視。前任校でも定時制の生徒たちと職業人の交流の場を設けており、生徒に多様な出会いをもたらすように努めている。

現任校では、その出会いのなかで、生徒が出し物の企画などにも挑戦。イギリスの海外研修では、生徒発案で、ソーラン節やダンス、クイズや弾き語り、生け花や書道、英語歌唱などを現地の人と楽しんだ。その主体的な交流のなかで、生徒の視野が広がることを、新井先生は期待している。



イギリス研修の現地での交流。ホームステイし、自分たちで考えた出し物も披露して濃密に関わるので、帰国の際は別れを惜しんで泣き出す生徒もいるという。





# 社会の大人も、生徒も、対等に繋げる。 繋がりが生徒たちの思考を自由にさせる

出水商業高校(鹿児島・出水市立) 山下優香先生

取材・文／長島佳子 撮影／甘浦麻結



## キャリアコンサルタントの 資格取得で広がった視野

「生徒は仲間」と語る山下優香先生。その思いに至ったのは、正規教員として初めて赴任した農業高校でのこと。先輩教員たちからはいつも怒られ、ある生徒とは校則についてぶつかり、何もかもがうまくいかなかった。でも自分に元気がないと、代わりに授業を進めてくれる生徒がいたり、担任のクラスの生徒たちが守ってくれることが多々あった。

「自分にできるのは、仲間でいてくれる生徒たちに寄り添うことだと思ったのです」

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 生徒も保護者もみんな仲間。 一緒に考えて支え合う

生徒、保護者、まちの人、管理職など、誰とでも上下関係ではなく対等な立場で考えて支え合うほうがずっと納得解が得られやすいと知った。

#### 2 多様な人と繋がることで生徒が 「本音やワクワク」を見つけられる

自分自身が校外の講習などでさまざまな出会いで一気に視野が広がり、それを生徒にも経験してほしいと、多様な人と生徒を繋げている。

#### 3 価値は時代によって変化する。 考えは変わってもいい

今の正しさが将来も正しいとは限らない。考えは変わってもいいし、就職後に何かあったら辞めてもいいと生徒に言うようになった。

やました・ゆうか ●鹿児島県奄美大島出身。小中高と先生に恵まれ教員を目指す。特に、生徒一人ひとりの良いところを見つけ、まちの人にも信頼されていた小学校時代の担任がロールモデル。長崎大学卒業後、奄美高校、大島北高校、鹿屋農業高校、出水工業高校を経て2024年より現職。2019年にキャリアコンサルタントの資格取得。



例えば、進路選択では生徒の夢は最後まで応援しようと決めた。他の先生は無理だろうと言う夢でも、本人と何度も語り合い、本音を引き出し、生徒自身がやるだけやっと思えるところまで挑戦を応援する。その結果、たとえ希望の進路は叶わなくても、本人は納得して別の道を進むことができる。

「教員の仕事は生徒の夢を諦めさせることではなく、夢に向かって最善を尽くす後押しをすることだと確信しました」

しかし、次の赴任先の工業高校で山下先生は担任を希望するが「無理だ」と言われてしまう。多くの生徒が進路で就職を選択する工業高校において、就職先の企業についての知識や繋がりが無い教員は、担任をもちにくかったのだ。

「寄り添いは土台。もっと専門的に生徒の人生を応援できる力をつけたい。そのときに知ったのがキャリアコンサルタントという資格でした」

資格取得のために半年間通った講習の場で、企業の人事担当者、ハローワークに勤める人、コンビニの店長など、さまざまな職種の人々との出会いがあった。それまでネガティブに受け止めていた転職も、海外ではキャリアアップに繋がることや、自分が万能でなくても足りない部分は人の力を借りればよいことなど、一気に視野が広がっていった。

「自分が知らない職種を生徒が希望すると、つい『大変だよ』と言ってしまいがちですが、その職種の人を知っていたり知識があれば、生徒に現場の声を提供できます。また、生徒たちに『何かあったら会社を辞めてもいいんだよ』と言えるようになりました。高卒で入った会社が一生の仕事になるかはわからない時代。それもキャリアコンサルタントの仲間を通して知り得たことです。私自身が多様な人と出会う

機会の大切さを実感できた経験でした」

それからの山下先生は、学校外の人々との繋がりをつくり、それを生徒たちに繋げる取組を次々と実践していく。例えば、出水市主催のリノベーションスクールの通知があった。市内の空き店舗などの遊休不動産を対象にエリア再生のためのビジネスプランを考えるスクールだ。当時、学校の授業が簡単すぎると、いつも寝ていた生徒がいたため、その生徒を誘ってみると興味を示したので二人で参加。ほとんどが社会人で高校生はその生徒だけだったが、とてもいきいきと取り組み、大人の中でも堂々と自分の意見を語っていた。

「まちや社会の大人と繋げることで、生徒が自分の本音に気づきワクワクを見つけられるとわかったのです。私自身もスクールで新たな繋がりができ、講師を学校に呼ぶなど、繋がりが繋がりを呼ぶ循環が生まれました。私の出身地の奄美大島のことわざ『水や山うかげ、人や世間うかげ（水は山のおかげ、人は世間のおかげ）』のように、人からしてもらったことは誰かに返し、温かな想いを循環させたいと思っています」

## 高校時代は選択の練習期間 今の選択が変わってもいい

まちと繋がることで、「高校生と関わりたい」「出水にいる生徒たちを応援したい」というまちの人々の想いを山下先生は肌で感じた。まちの人と生徒を繋ぎ、その想いとその方々の専門性を循環させるために、山下先生が外部の人を学校に呼んでくると、管理職の先生方も喜んで応援してくれた。

招いた講師には全校生徒を対象に講演をしてもらうこともあれば、山下先生の家庭科の授業で



ワークショップをしてもらうこともある。さらに、地元  
の企業の人々と共に、放課後に生徒を集めてワー  
クショップを行う部活外活動「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」(本  
ページ下部のコラム参照)も実施。多様な形式で  
繋がりを広げている。

幅広い活動を通して山下先生が意識している  
のは、生徒とは上下関係ではなく対等に接するこ  
とだ。

「生徒は仲間です。今は高校生ですが卒業すれば  
すぐ社会人になる人たち。卒業生になればまた一  
緒に、次世代の生徒のための取組ができるかもし  
れませんが、もともと生徒たちは、私が『教える』ことを  
しなくても、機会さえ与えれば自分たちでやりたいこ  
とに気づき、実現する力をもっているのです」

それでも答えを欲する生徒もいる。そのときは、  
「今価値があると思っている答えが未来には変わ  
っているかもしれない。だから、今決めた答えが変  
わってもいい」と伝えている。

「変わってもいいと言われても生徒はモヤモヤし  
ています(笑)。でも、変化していく世の中で生徒た

ちは自分の人生を創っていかねばなりません。  
だから、『高校生はたくさんの中から選ぶ練習をし  
ているんだよ』と言っています」

多様な大人と繋がりをもち、自身での気づきを  
促されると、生徒たちの思考や物事の捉え方が自  
由になっていくと山下先生は感じている。

ただし、生徒自身が自由な思考になり、自分の好  
きなことを見つけられたとしても、進路選択において  
は保護者の応援がカギとなる。教員が関われるの  
はわずか3年間。卒業後も生徒にずっと寄り添い  
続ける保護者と生徒自身の想いのすり合わせも、  
山下先生が大切にしていることだ。三者面談は生  
徒と保護者の想いを重ねられるよう、「保護者の次  
に、2番目に生徒のことを思っている人でありたい」  
と伝え、本音を言い合える環境づくりに徹する。最  
終的には保護者から生徒に「がんばりなさい。これ  
からも応援している」という言葉が出てくるという。

「生徒にも保護者に対してもそれぞれ敬意を払  
い、一人の人として対等に関わり、共に考えること  
が、教員にできることだと思っています」

山下先生の「現在地」

## 学校の外で有志が参加する部活外活動「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」

学

校の近隣にある企業と連携して、放課後に自由に生徒が集ま  
って地域の大人と交流する場「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」。きっかけは、  
「小学校時代の学童のように、放課後に気軽に寄れる居場  
所が欲しい」というある生徒の声。その声に応え、地域の人々と山下先生  
が連携して2024年6月に発足。メンバー企業が日替わりで場所を提供し  
高校生たちは自由参加。そこにいる大人と会話したり、大人たちの知見を  
いかしたワークショップなどのイベントを開催したりしている。出水市の高校  
生なら誰でも参加できる。取材した当日も、ある生徒が「家に休眠焔があ  
り、祖母がなんとかしたいと言っている」と話すと、山下先生がすかさず「面  
白そう!何かできないかな?」と声をかけ、さまざまなイベントのアイデアが生  
徒たちから繰り出されていた。



「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」ではまちの人、高校生がフラットな関係  
のなか、対話しながら共にやりたいことの意見を出し合っ  
て運営している。



CASE

3

# 生徒の心が動いた瞬間を見逃さず 思考を深める対話を繰り返していく

若狭高校(福井・県立) 小坂康之先生

取材・文／長島佳子



## 生徒の言葉に揺さぶられ 対話によって心を引き出す

宇宙飛行士の野口聡一さんが、高校生が開発製造したサバの缶詰を食べる様子を宇宙から動画配信。そのニュースが舞い込んだのは2020年のこと。宇宙日本食となった「サバ醤油味付け缶詰」を作ったのは若狭高校の生徒たち。初代の生徒たちが取組を始めてから14年が経っていた。その間、生徒と共に歩んできたのが小坂康之先生だ。

小坂先生は元々、2013年に統廃合され、現在の若狭高校の海洋科学科として生まれ変わった

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 生徒の人生を邪魔しない。 アドバイスは余計なお世話

「資格を取れ」、「進学した方がいい」などの先回りした助言は、良かれと思えども余計なお世話。生徒自身の声に耳を傾け引き出したい。

#### 2 生徒の人生にちょっとだけ お邪魔させてもらう

生徒たちが何かにワクワクと心が動いた瞬間に共感して、一緒に心から楽しむ。生徒の発言に自身が揺さぶられることも多々ある。

#### 3 どんな生徒も大人も、今より 良く生きたいことを心に置く

素行が悪く見える生徒であっても、人は誰でも今より良く生きたい、良い方向に向かいたいと思っていることを心に置いて向き合っていく。

こさか・やすゆき ● 東京水産大学卒業後、水産高校教員を目指し小浜水産高校に初任。地域と連携した海の再生活動や地域食材を利用した商品開発などを指導。2007年から宇宙サバ缶の開発に携わる。2013年、統廃合により若狭高校海洋科学科に転任。福井大学教職大学院、福井県立大学大学院生物資源学研究科修了。博士(生物資源学)。





小浜水産高校の教員だった。サバ缶製造実習は小浜水産高校開校時から続く伝統だったが、より高品質な製品を目指し2006年に国際的な食品衛生基準であるHACCPの取得を進めた。HACCPはNASA(アメリカ航空宇宙局)が宇宙食の開発のために基準を作成した起源があり、そのことを小坂先生が授業で伝えたとき、ある生徒が発した言葉がすべての始まりだった。

「それなら、わたらのサバ缶も、宇宙に飛ばせるんじゃない?」

普通の大人なら、生徒たちの荒唐無稽な夢と受け止めていたかもしれない。しかし、目を輝かせていた生徒たちの本気のワクワクに、小坂先生自身が揺さぶられ共感したのだ。そこから学校の統廃合を経て14年間の宇宙サバ缶開発が始まり、現在も引き継がれている。

生徒の気持ちに本気で寄り添い、夢を実現させることができたのは「対話」にあると小坂先生は語る。対話の重要性に先生が気づいたきっかけとなったのが、教員1年目の苦い経験だった。

「生徒たちから『授業がつまらない。先生たちの授業は中学の先生より下手』と言われたのです」

授業をろくに聞いてくれないのは生徒たちのせいではなく自分の実力不足だったと痛感。それ以来プリントを工夫したり、体験的な授業を増やしたりすると、寝ていた生徒の8割は起きるようになった。しかし、まだ寝ていた生徒を起こすと怒って教室から出て行ってしまった。すると、リーダー的な存在の

生徒が「先生は悪くない。追いかけてなくてもいい」と言ってくれた。彼の一言で他の寝ていた生徒も起きて、授業が楽しいと言ってくれるようになった。生徒たちの変化に小坂先生は、彼らは伸びたい、正しい方向に教員と歩みたいのだと強烈に感じた。

「それまでの自分はしゃべる一方で、生徒の声に耳を傾けていなかった。彼らの声に耳を傾け、対話することで一人ひとりと向き合えるようになりました」

生徒との対話は、何が好きで、何に価値を感じ、何を心地よいと思うか、もともと生徒たちがもっているものを引き出すためだ。さらに深めるためには「なぜそう思う?」「どこに価値を感じる?」「その気持ちを具体的に言える?」という問いをかけている。

## 探究のプロセスに対話を組み込むことで深みが増す

こうした対話を、小坂先生は現在も探究の時間で実践し続けている。

「探究は一人でやると思考が固定化して深まりにくいのです。他者の言葉や他者に向けて発することによって新しいことが見えてくるが多々あります。本校ではグループだけでなく一人での探究も認めていますが、プロセスの中で他者との対話の時間も組み込んでいます」

対話は発話でなくても、文章でもかまわない。日頃口数の少ない生徒が書いたものに対し、「こんなに深くて面白いことを考えていたんだ!」と他の生徒がゾクゾクしている様子も頻繁に見られる。対話の相手は生徒や先生以外の外部の人でもよいし、さらには人でなくても、物でも自然でも生徒の心に火をともしせるものは無数にある。それも含めての対話なのだ。

2007年のプロジェクト発足から14年かけて、先輩から後輩へと想いが引き継がれて完成した宇宙サバ缶。



そして他者とのヨコの対話だけでなく、自分自身の中で深めていくタテの対話も重要だと小坂先生は考えている。

「他者との対話を踏まえて、生徒一人ひとりの心や頭の中で起きている変化を見逃さない見取りの力と共に、探究を楽しむ姿勢が教員に求められています」

## 対話で育った卒業生が見取りが上手な教員に

若狭高校は10年以上前から探究に力を入れてきたが、高校での探究が大学の研究のように専門的になりすぎることには懸念がある。統廃合の際、若狭高校の海洋科学科となる旧小浜水産高校のあり方についての目標設定を、ステークホルダーとなる地域の漁師や企業、大学の教員と共に検討した。期待されていることについて、先生たちは水産に関する最新の知識や技術の習得と考えていたが、ステークホルダーたちからは「興味や関心、思考力や協働性を育ててほしい」と言われた。地

域から求められているのは資質・能力だったのだ。

「地域の方々との対話で、『何のために学ぶのか』を突き詰めたときに、ある漁師の方が『幸せになるためだろう』とおっしゃった。今、教育振興基本計画などでも謳われているウェルビーイングと一致していて、この言葉にも揺さぶられましたね。探究が始まったとき『時代を生き抜いていくために』という目的がありましたが、社会や時代に適応するためだけに生徒を育成しているわけではなく、一番の目標は生徒たちが幸せになるため。だから探究であまり無理はしなくていいと思います」

探究学習を経験した卒業生たちが、一旦は地元を離れて進学し、教員となって若狭に戻ってきている例が増えていると小坂先生は嬉しそうに語った。

「先日、うちの生徒と近隣の小学校に出張授業に行ったのですが、その学校に新任の先生がいて、生徒の見取りが実にうまい。『若いのにすごいですね』と感心して教頭先生に伝えたら『小坂先生の教え子でしょう』と。大人になっていたのが気づかずびっくりして。自画自賛してしまいました(笑)」

小坂先生の「現在地」

## 探究が教科授業の改善に繋がり進路との接続が明確になった

小

坂先生は、昨年度まで進路部長を担当(今年度はSSH 研究部長)し、その間、国公立大学への進路実績が向上した。偏差値だけではなく、生徒たちが学問領域で進学先を選択するようになってきた。これは探究を、自分のやりたいことを見つけ生き方を知る「自分の動詞探し」と位置づけた効果だと小坂先生は考えている。また、探究によって教員の、生徒一人ひとりを丹念に見取り、生徒の思考を深める問いを発する力が育ってきた。これは生徒支援、キャリア支援だけでなく、教科授業の改善にも繋がる。探究への真剣な取組が、教員の授業力と進学実績の向上に繋がったのだ。

「授業が面白くないと生徒たちの成績は上がりません。教員の授業磨きになる探究は全校教員で取り組まなければもったいないです」



探究の授業は1クラスを複数の教員が担当。あくまで生徒主体のため、先生たちは生徒の様子を見守り、生徒の心に火がついた瞬間を見逃さないように努めている。



CASE

4

# 日常の活動にひそむチャンスから 外の世界にあるチャンスまでつかめるように

唐津西高校(佐賀・県立) 中西美香先生

取材・文／松井大助 写真／諸石 信



## 目の前に転がっている チャンスを見出すには

唐津西高校で教頭を務める中西美香先生は、生徒によく「3C」の話をする。「チャンスがあればチャレンジして。それが自分のチェンジ、変わるきっかけになるから」と。

ただ、「チャンスは転がっていても意外と気づかない」とも思っている。今やっていることの中にひそんでいるのに見過ごしたり、一歩踏み出さないと出会えなかったり。だから生徒には「アンテナを高く張ってチャンスをつかんでほしい」という。

ではそのアンテナが高まるよう、教員にできるこ

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 内発的動機が生まれるよう やるべき課題をアレンジ

目の前の生徒たちの興味・関心(または今の学校の組織文化)に合わせて、学校でやるべき課題を調整し、本人たちのやりたいことに繋がるように促す。

#### 2 内発的動機が生まれるよう チーム構成を工夫

生徒同士や教員同士でチームを組む時は、目的に応じて異質または同質の集団にしたりと構成を工夫し、個々が主体性を発揮しやすい環境にする。

#### 3 外と繋がることを応援し 選択や判断は本人に委ねる

生徒や同僚の先生に、外と繋がる機会を届け、以降の選択は本人に委ね、外部との関わりのなかで視野を広げたり、自身の強みを発見したりしてもらう。

なかにし・みか●写真中央。大学卒業後、佐賀県の数学科教員に。2018年に佐賀大学大学院学校教育学研究所(教職大学院)を修了、主幹教諭時代に同大客員准教授も3年間兼任した。現任校では教頭として普通科改革を推進、教育活動の柱に据えた探究活動にも注力。写真は、探究支援部の山口崇先生(左)と、末松真樹先生(右)と共に。





とはあるのだろうか。

中西先生は「外発的に始まるものを、どう内発的なものにもっていくか」を考えてきた。授業などで教員が計画した形で始まったことでも「自らやりたくなり、自分の可能性が広がるもの」を発見できるチャンスがある。生徒がそう思えるように。

数学の教員として取り組んだのは、学習課題を生徒にとって身近なものにアレンジすることだ。商業高校では、部活動が盛んでスポーツへの関心が高いことに着目。教科書にある気温のデータではなく、生徒たちのスポーツテストの結果を基にデータ分析の授業を行った。すると「サッカー部と野球部、どの種目でどちらの運動能力が高いか」など、競技特性と各種目の相性を推しはかる自発的探究が始まり、最終的には校外の大会で成果発表する活動へと化した。

グループの活動では、与えた課題を、生徒が自分ごとにしていけるようにチーム構成も工夫する。

「互いの考えが広がるようにしたいなら『異質の集団』に、特定テーマへの考えを深めたいなら『同質の集団』にあえてしたりします。同じ市町村に住む生徒同士でグループ分けし、統計データを基にした地域分析をしたこともあります。自分の住む地域だから興味をもって進められますし、別の地域に住む生徒たちの発表を聞くことで『ほかの地域とそんな違いがあるんだ』と当事者としての発見を楽しんでくれました」

## 知らない世界との邂逅が 未来の選択の幅を広げる

生徒が「外に出る・外と繋がる」ことも積極的に応援してきた。

「がんばっている生徒の興味・関心に合わせて『学

校外の活動やコンクール、プレゼン大会の募集があるけど、やってみる?』と声をかけるんです。無理強いはせず、やるかどうかの選択は生徒に委ねます」

生徒がやることを選んだら、発表や活動の準備をサポート。校外に出たら、あえて距離を取って見守る。「教員の目が行き届かないほうが、生徒は自分で考えて行動する」からだ。その外での挑戦が、仮に生徒目線で失敗に終わったとしても、「やってみて課題がわかったなら、それも収穫だよ」と背中を押してきた。

「知らない世界を知っていろいろな考えにふれると、生徒の視野が広がります。日常では接したことのない人と関わるなかで、生徒のもつ良さが引き出されることもあります。外に出ることで巡り合えるそうしたチャンスを体感してほしいのです」

こうした思いは、ボランティア部の顧問を長年務めるなかで培われたという。ボランティア部の生徒は、高齢者や幼児と接したり、大人と協働したりと、多様な人と関わる。そこで新たな一面を見せて成長することが多かったのだ。学校でよく注意される生徒が、幼い子と接した時に自然にしゃがんで目線を合わせたのを見て、胸打たれたこともあった。

中西先生自身が「外に出る」ことの魅力を感じてきたことも大きい。

40歳で農業高校の進路指導主事になり、リーマン・ショックの不況時、生徒の就職先を探して10社前後の企業を回った。企業人の知見にふれ、自らビジネス書を読みあさった。40代後半に、県下に新設される教職大学院の研修に面白そうだと飛び込んだ。学校組織や教育経営について研究し、小中学校の先生とも交わった。そうして外の世界にふれると「見える景色が変わり、未来の選択の幅が広がった」という。





## チャレンジや学びの機会が 教員にもたくさんある学校に

教職大学院修了後、中西先生は、生徒だけでなく、先生にも目を向け、組織運営に深く関わるようになった。見える景色が変化して選んだ道だ。

関心を寄せてきたのは、「外発的に始まる学校改善を、いかに内発的なものにするか」。取り組んだのは、国や県の方針として導入すべきものを「今いる学校の組織文化に合うようにアレンジして進める」ことだ。

主幹教諭を務めた工業高校では、コミュニティ・スクール導入を推進。教育方針を共に考える学校運営協議会のメンバーを、地元有識者などから選出した。その際は、地元の新聞1年分を見返して候補者をリストアップしつつ、校内の先生にも「繋がりのある人や繋がりを深めたい人」について1カ月近くヒアリングし、皆の意見を反映して組織化した。

その前の商業高校では、コロナ禍にオンライン教育推進プロジェクトを牽引。チーム構成では、IC

Tが得意で前向きな先生だけを集めるのではなく、苦手意識がある先生にも参加してもらい、異質な集団として多様な意見を出し合って、皆で挑戦できるやり方を模索した。

先生が「外と繋がる」ことも後押ししている。自身の人脈を生かして外部の人・団体に学校教育に協力してもらう時、中西先生は必ずほかの先生にも繋いできた。校務分掌や教科の専門性から、協力者と結びつきそうな先生を活動の立ち会いに誘うなどして。以降はその先生が自分の企画でも連携できるようにだ。

「入口は私個人の繋がりでも、『組織と組織の繋がり』にしていきたいのです。外と繋がることで先生方の視野も広がりますし、外部の多様な意見を基に、時代の変化に応じた学校運営を皆で考えるチャンスも生まれます。今の時代はジグソーパズル型でなく、組み立てブロック型だと言われたりしますよね。生徒のキャリアも、学校のあり方も、枠に当てはめるといふより、自分たちで形から思い描き、柔軟に創造していくことができたらと思っています」

中西先生の「現在地」

## 探究活動を軸とする学校改革を組織全体に広げようと邁進

普

通科改革の一環で、探究活動を軸とするコース制を導入した唐津西高校。校務分掌に「探究支援部」を新設、そのメンバーを中心に企画運営を進めている。中西先生は教頭としてその取組をサポートし、また、組織全体に熱を広げられるように「学年と分掌という縦と横を意識して」個々に働きかけている。

探究支援部の企画で、多様な社会人を招いて生徒がテーマ発表した際は、学年団の希望を基に人集めで協力。22人も集まり、担当教員から「楽しになってきました」と言われ、それが嬉しかったという。

学校の異動や立場の変化で、やる事が変わる教員という仕事。今自分に求められていることは何かを考え、「置かれた場所で咲くことができれば」と中西先生は言う。



社会人を招いたテーマ発表。外部の協力者から同僚の先生まで、中西先生は関わった人から「気づいたら巻き込まれていた」とよく言われるそうだ。